

静岡高校野球



Inside Report

成り上がりストーリーズ

高須大雅 (明治大)
榊原遼太郎 (國學院大)
佐野大陽 (阪神)



勝負に挑むのは 今しかない

2年ぶりセンバツ出場!
常葉大菊川
選手名鑑

船川 誠

MAKOTO FUNAKAWA

昔日の記憶に刻まれた軌跡



TOMOYUKI MORISHITA

森下 知幸

名将が遺したものの

昨年、長年に渡って静岡の野球を支えた2人の監督がこの世を去った。
バントなしのフルスイング野球で全国制覇に導いた森下監督。
そして、その森下監督を育て、熱い情熱で選手たちを鍛え上げた船川監督。
名将が遺したものは何だったのか。関係者のもとを訪ね、記憶に刻まれる2人の軌跡を辿った。



- 1949 静岡県静岡市で生まれる
- 1965 静岡高に入学
- 1966 主将を務め秋季県大会優勝
- 1968 早稲田大入学
準硬式野球部に入り、1年春から活躍
- 1972 教員として浜松商に赴任
- 1978 部長でセンバツ優勝
- 1982 静岡高の監督に就任
夏の甲子園出場
- 1987 夏の甲子園出場
- 1993 清水東の監督に就任
- 2002 静岡市立の監督に就任
- 2006 日本高野連の育成功労賞を受賞



- 2010 定年退職
- 2012 中学生チーム「静岡ジュニアユース
BBC」を立ち上げる
- 2016 城南静岡の監督に就任
- 2022 夏の大会で初のベスト16に導く
- 2024 多発性骨髄腫のため死去



- 1961 静岡県島田市で生まれる
- 1976 浜松商に入学
- 1978 主将を務めてセンバツ優勝
- 1979 中部電力入社
- 1981 浜松商のコーチ就任
- 1984 夏の甲子園で監督としてベンチ入り
- 1989 日大三島の監督に就任
夏の甲子園出場
- 2002 常葉菊川のコーチ就任
- 2006 常葉菊川の監督に就任
- 2007 センバツ優勝
夏の甲子園ベスト4
明治神宮大会優勝



- 2008 センバツ出場
- 2013 センバツ出場
夏の甲子園出場
- 2016 夏の甲子園出場
御殿場西監督就任
- 2018 秋季県大会優勝
- 2024 大動脈瘤破裂のため死去





名將が遺したもの
森下 船川
CHILDREN

鈴木彰宏 & 矢嶋祐輝

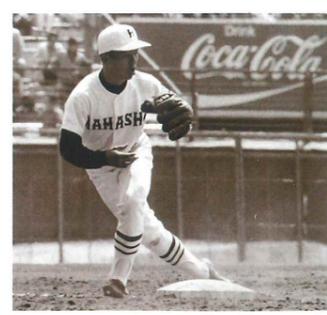
「浜松南シニア監督」 「三島ゴールデンイーグルス監督」

「あの日誓った約束」

森下氏は常葉菊川監督以前、浜松商と日大三島でどんな指導をしていたのか。当時の教え子で、遺志を受け継ぐ2人が心に秘めた熱い思いを打ち明ける。

鈴木彰宏の証言

ヒーローとの握手。それが運命を変えた。1978年春、浜松商が全国の頂点に立つ。2回戦で優勝候補の早稲田実業を撃破して勢いに乗った。決勝戦はエース・樽井徹の完封で福井商を下し、主将の森下知幸が紫紺の優勝旗を手にした。



高校3年春は背番号5で甲子園に出場した鈴木

当時、小学3年生だった鈴木少年も一目見たいと大興奮に潜り込んだ。「ものすごい人だからの中で、森下さんに私が握手をしてもらいました。それにめちゃくちゃ感動して」

と上げてくれたりと、結局、あの人ものめり込んでしまっていたんだと思います。秋はレギュラーを手にし、東海大会ではタイムリーを放った。そのとき、誰よりもベンチで喜んでいたので森下だった。

「まだ森下さんも20代前半。ハチャメチャの度合いが違いましたね。スパーノックマシーンでしたよ。打つ方も捕る方も本気だから、最後は喧嘩のようになり、ショートの前田（健記）と2人で、ボールを森下さんに投げつけていたくらいでした。よく怒られたけど、夜中までティーをずつ

「自分が誘われたわけではなく、何とかお願いして浜商の野球部に入れてもらったくらいだから、ど下手くそ。でも森下さんは、そういう下手くそでも頑張るヤツ、気持ちの入るヤツが好きだったんです。そういう意味では一番可愛がってました。卒業後、大学でプレーする選択肢もあつたが、自らの限界を感じ、一般就職する道を選んだ。

鈴木彰宏 & 矢嶋祐輝



鈴木彰宏 [すずき・あきひろ]
1968年4月10日生まれ、静岡県浜松市出身。浜松商3年春にセンバツ出場。卒業後、中部電力に入社する。2009年から「浜松南リトル」の監督を務め、11年に全国優勝と世界大会準優勝。15年の侍ジャパンU12代表のコーチを経て、「浜松南シニア」の監督に就任。以後、春夏通算で計8度（今春を含めて）、チームを全国出場に導く。

「上手い選手でも下手な選手でも同じような目線で見ていました」（鈴木）

5年。当時、常葉菊川の監督を務めていた森下と交わした約束が、指導の原点になった。「シニアの監督を引き受けるか迷っていたに相談したときに『自分も若い頃にでたらめなことをやってきたけど、監督なんて偉くもなんともない。選手のためにやってほしいんだ。もし、お前が監督をやったら勘違いするようないことがあつたら縁を切る』と。全国で優勝する監督でもこうなんだと感じました」

一気に逝ってしまった感じでした。近年、「浜松南シニア」は全国大会の常連となっている。今春も全国選抜大会への出場が決まった。また、卒団生からは鈴木叶（ヤクルト）、佐藤太陽（西武）がプロ入りするなど、上のレベルで活躍する選手が多い。チームのベースとなっているのは「出来ることだけやればよい。出来ないことは出来ない」というシンプルなもの。その中で鈴木は「子供たちの成長の邪魔だけはしないように」と意識している。

この日をきっかけに、2人の距離はグッと近づいていった。毎週のように電話でお互いの悩みや愚痴を聞き合ひ、そんな関係はいつまでも続くと感じていた。訃報が飛び込んできたのは今年の正月明けのことだった。「亡くなる3日前も電話で話していました。『いつから練習を始めるんだ？ また行くわ』って。それが最後でした。前年の12月に自分の父親を亡くしてしまっていて、2人の親父が

試合では可能な限り、多くの選手をグラウンドに送り出し、コンパートも積極的に行う。「1打席でも、守備の1イニングでも、代走でもいいから、試合に出れば喜びもあるし、それが伸びるきっかけになると思うんです。森下さん

がよく言っていたのは『いい思いをするだけじゃなく、悔しい思いをした方が人間は伸びるんだ』って。どんな立派な指導をするよりも、試合に出て感じた方がよっぽど上手くなると思うんです」

「入学した当初、どのポジションだろうと、全員サイドノックをやって、森下さんがオツと思う選手を引っ張ってメンバーに入れてもらおうのですが、その中に入る事ができませんでした」

「大学を卒業する頃には半分友達みたいなになっていたので、やけに厳しいな。これはバレーしているなと思います」

「あくまで『お前がすごいわけではない』と前置きした上で、『ここはチーム全体が成長できる仕組みが出来上がっている。よそのチームは監督の言うことを聞かないと怒られるけど、お前のところだけは言うことを聞いてくれるだけだ』と怒られるから伸びるんじゃないか』って言ってくれたことがあつたんです。自分にとっては最高の誉め言葉だと受け取っています」

矢嶋祐輝の証言

森下は浜松商での9年間に渡りコーチを経て、1989年から日大三島の監督を務めた。「気合と根性。そして守備と走塁。あの頃、森下さんが日大三島でやっていたのは浜商のような細かい野球だったと思います。自分も、小学生の頃から浜商に憧れていました。振り返ってみると本当に出会えて良かった。ただそれだけです」

「上下関係も含めて辛くて辞めていく選手もいました。あの人のことが嫌いだという人間はいませんでした」

「あのとき見捨てず、ちゃんと叱ってくれたからこそここまでやれたのかなと思います。野球を通じて、森下さんからは人生で大切なことをたくさん教わりました」

天を仰ぎ、そう語るのが矢嶋祐輝。森下が赴任し、2年が経ったときに入学した。三島南中時代は公式戦で勝った経験がほとんどなく、体もそれほど大きくなかったが、森下は矢嶋にキラリと光る何かを感じていた。

「森下は中途半端なことをしたらいかん」と説教し、「もう一度、静岡ガスでチャンスを貰ったんだからそれを取り戻すくらいの熱意を持って。そうじゃないと、お前みたいなヤツは信用しない」と厳しい言葉をかけた。

2020年には学童野球の「三島ゴールデンイーグルス」の監督に就任。23年には県大会を勝ち抜き、全国大会出場を果たした。

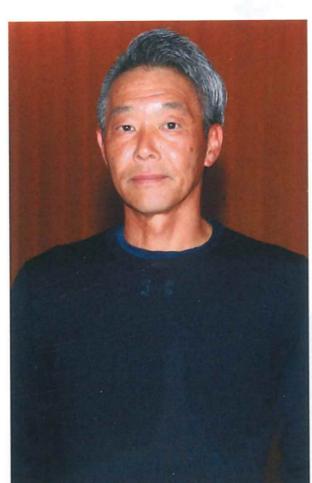


昨年末はハヤテJrのコーチを務めた矢嶋

「晩年、森下さんがよく口にしたのは正しさより優しさ、失敗こそ王道という言葉でした。正しさよりも優しさが大事なんじゃないか、失敗して生きていく人が多い中で、それこそ王道なんだと。今は子供たちと関わる上で、私自身の指針になっています」

「森下さんの影響もあって、仲間とのつながりをチーム方針の最上位に置いています。人とのつながりに長け、ともに尊重し合うことが、最後はここ一番の力になるんじゃないかと思っています」

「森下さんから人生で大切なことをたくさん教わりました」（矢嶋）



矢嶋祐輝 [やじま・ゆうぎ]
1976年3月10日生まれ、静岡県三島市出身。日大三島では主将としてチームをけん引。卒業後は国士舘大に進学。2年秋からベンチ入りする。静岡ガス入社後はレギュラーとして活躍し、2001年の宮城国体で優勝。監督も3年間務めた。20年からは「三島ゴールデンイーグルス」の監督となり、23年にチームを全国出場に導いた。